

まんだら通信

第206号 (通巻241号)

平成25年08月 西暦2013年 佛曆2579年 皇紀2673年

安房国八十八ヶ所 第一番札所

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口 1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



今年の下立松原神社のお祭りは8月3日と4日でした。川下の港に集まった西横濱・川下・本郷の山車です。

あの日から六十八年

このお寺から左に二、三百メートル離れた高さ百メートルの台地に、大台という集落があります。伊豆大島に向いた西側は殆ど直角に近い絶壁ですが、この上に七軒ほどの家があつて、夏涼しく、木立に囲まれて静かな住みやすいところです。大東亜戦争が始まった昭和十六年から、中学を卒業してお寺のお弟子として得度するまで、この集落の伯母の家で育ててもらいました。

と、並大抵の苦勞ではなかったなと思いつたります。今更間に合わない知りながら、「孝行をしたい頃に親はなし」の言葉通りで反省ばかりしています。戦争が終りに近づいた頃は、東京などを爆撃する米軍機ボーイングB29の編隊が、野島崎を目標にやつて来るので、毎日のように空襲警報のサイレンが鳴りました。夕方になると、ニキロ近く離れた海岸近くに住む人たちが、連れ立って防空壕のあるこのお寺の裏に避難する様子が、大台からよく見えました。昭和二十年七月十八日の夜中、野島崎の沖から城山の無線基地をめぐって艦砲射撃があり、数分のことだったようですが、

島崎を中心に二十人以上が死傷しました。この頃になると、艦載機のグラマンが時々やつてきて、動くものなら子供でも構わず、機銃掃射をするようになりました。

八月六日と九日には広島と長崎に原子爆弾。そして八月十五日、天皇陛下のご聖断で戦争が終わりました。この戦争で三百万人の死傷者がたといふことですが、工業地帯だけでなく、奈良と京都以外の、日本中のあらゆる都市が焼け野原になりました。あの頃『子科練くずれ』という言葉があつたように、国のために誠を捧げるつもりだった若い人の中には、おまえ達は間違っていたといわれ、心の支えを失って、悪さをする人がいました。覚醒剤のヒロポン中毒が問

題になったのもこの頃ですね。

おまけに昭和二十年は冷害で、飢え死にする人がたくさん出るだろうといわれたので、吉田首相はマッカーサーにねじ込んで、緊急援助をしてもらい、飢え死には免れたものの、統計の間違いで援助のお米が大分余つてしまい、それを非難したマッカーサーに「日本の役所が優秀ならば、あんなとの戦争に負けることはなかった」と、マッカーサーを煙に巻いたという話が伝わっています。

その間には皇居前広場での二十五万人が参加した「米よこせメーデー」や三池炭鉱争議など大きな出来事がありました。けれども、国を動かすような暴動や騒乱は、ついぞ起きませんでした。そして昭和三十一年、『もはや戦後ではない』と経済白書に書かれるような、奇跡の復興を果しました。

私が自動車の運転免許証をとつたのは昭和三十五年ですが、その時でさえ四輪車など一生買えないと思っていました。

ところがご存知のように、今では田舎に住んでいる人ほど車を何台も持つていますね。その後も経済成長の勢いは止まらず、日本と戦つたのはイギリスやオランダ、フランスや蒋介石の中華民国などですが、勝つた方を差し置いて、一時はアメリカに次いで世界で二番目のお金持ちになりました。何故、ないない尽くしの焼け野原から、奇跡の復興が出来たのでしょうか。その理由は、他の国に比べて日本にだけあるもの、思いやり、譲り合い、約束を守るというような、私たち日本人には当たり前の心構えですが、はるか縄文時代のご先祖から受け継いできた『和の心』だといつて間違いないと思うのです。

今、色々の国が行っている国際的な世論調査では、日本人が「好ましき」ではないのも上位一〜五位を占めているそうです。これこそ、独りよがりではない何よりの

証拠ですね。とはいふものの、まだ復興していない大事なものが残っています。冷静に歴史を復習すれば全くの逆であることが分かる筈ですが、『世界に対して、日本は悪いことをしました』と思つている人が、この国には未だにたくさんいるということ。相手の嫌がることは先送りして、取り敢えずお金で片づけておこう」という、歴代の政府の対応が、シナや朝鮮などの言いたい放題を許してきた結果ですが、このままでは「白人国家に支配・抑圧されたアジア民族の解放」という、人が生きる上で一番大事な、自分を犠牲にしてもという大義の心で戦つた日本民族の誇りを取り戻せません。

私たちが心に刻むべきことは、フィリピンもインドネシアもタイもインドも、その他のアジアの国々から見た日本は、それぞれの国の白人を追い出して、独立に導いた『アジアの希望の星ニッポン』だということ。ほんの一例ですが、敗戦後、敢て帰国せず、インドネシアの独立戦争に参加した旧日本軍兵士千人のうち、戦死者は実に七百人だったそうです。インドネシアとの平和条約が結ばれた時、ハッタ副首相は「日本軍は我が国独立の恩人なので、賠償金八億ドルは賠償としてではなく、独立達成の祝賀金として受け取らせていただく。」といったそうです。今言えることは、間違いと分かつていながら、『南京三十万人大虐殺』や『韓国従軍慰安婦』という、根も葉もない捏造記事などを書き続ける、例えば朝日新聞などを読む人がいなくなつて、廃刊に追い込まれるという事態になった時、靖国神社に祀られている英霊や、沖繩や本土や外地で、無差別爆撃や自決で亡くなった人たちに、朗らかな気持ちで報告出来る時であり、それが本当の意味で『もはや戦後ではない』といえる時になる筈です。

にっぽん人情小噺

第九十一話

鳳仙花

三遊亭鳳豊

お盆の季節になりますと、いろいろな話が私のもとに飛び込んでまいりますが、やはり名優と呼ばれる方は、亡くなる時にも伝説を残すようです……。

歌舞伎の世界で名人と呼ばれた六代目尾上菊五郎という方は、亡くなる寸前まで弟子を叱ったようですね。

長い間、病床に伏せていた菊五郎丈、いよいよ臨終の瞬間が近づいたので、家族をはじめ、たくさんの人たちが静かにそのまわりを囲んでいたそうです。

静寂が続きました。皆さんが見守る中、やがて菊五郎丈、大きく息を吸い、目を静かに閉じました。その瞬間、誰よりも早く、弟子のひとりが「ワッ」と泣き出したのです。

すると、名優はカッと目を見開き、その弟子にしっかりとした声で、こう言っただけです。

「まだ、早い！お前の台詞まわしは昔から間が悪かったが、最後の最後までダメだ！」そう言って、息を引き取ったといえますから、さすが名人ですね。

今日は、ある東北の小さな町のお祭りです。起った話をご紹介します。

ある町に、遅い夏がやってきました。そこでは、あまり知られていませんが、「鳳仙花祭り」というお祭りが古くから行われていました。夜、ろうそくに照らされた植木鉢の鳳仙花が各家々の玄関に飾られるという、それは儂げで幻想的なお祭りです。

みどりさんは、その夜、見覚えのあるひとりの男性がろうそくの明かりに照らされた町の路地を歩いているのを見つけました。

「吉永さん……ですか？」

「ああ、こんばんは。お久しぶりです」その人は、みどりさんの親友の夫で、カメラマンでした。まだ、四十代だと思っただけが、みどりさんにはその人がずいぶん年をとったように思えました。彼ら夫婦は、この小さな北の町に、東京から移住してきたご夫婦でした。

みどりさんはその奥さん、吉永裕子さんとは地元の演劇サークルで知り合いました。裕子さんは、東京の女子大で演劇部に入っていたので、こんな田舎の演劇サークルではすぐに主役を演じていました。

それに比べて、みどりさんはもともと引込み思案だったこともあり、何度かサークルを辞めようと思いましたが、積極的に明るい裕子さんのおかげで、なんとか活動も続けていました。しかし、結局はどうしても演劇をやっていく自信を失い、とうとう辞めてしまったのです。

しばらくして、そのサークルの発表会が開かれました。それが、去年の「鳳仙花祭り」のことでした。

みどりさんは、昔いっしょだった仲間たちがどんなお芝居を見せてくれるのだろうと楽しみに、静かなお祭りの夜、ひとりで町の公民館に出かけました。

それは素晴らしいお芝居でした。特に裕子さんの、主役になりきった表情豊かな演技は、演じているというより、まさに「その役になる」という演劇を心から楽しんでるようでした。

公演が終わったので、みどりさんは親友の裕子さんのいる楽屋に行きました。すると彼女はみどりさんを誰もいない廊下の隅に連れて行き、こう告白したのです。

「みどり、私ね、実はガンで、明日、手術なの。だからね、どうしてもこのお芝居を成功させたかったのよ。ひよっとしたら、もう二度と舞台に立てないかもしれないから」

みどりさんは驚きました。口では「大丈夫よ、いまの元気さえあれば、裕子さんは病気に勝てるわよ」と慰めたものの、やはり、あまりにショックだったために、その言葉には力がありませんでした。

裕子さんは、そんなみどりさんの肩を抱くようにして、こう言いました。

「ねえ、ひとつだけ約束してくれない？いい？ 私があなたに連絡をするまで、あなたは私に何もしないこと。いいわね」「え、お見舞いもいけないの？」「だから、言ったでしょ。お見舞いしてほしい時は私のほうから必ず連絡するから、あなたは何もしないでほしいの」

「はい」それは、まるで舞台の上の女王様と召使のようでした。

それから一年経ったこの夜、みどりさんは吉永裕子さんの夫と出会ったのです。

「裕子さんは？」

「思わず、みどりさんは尋ねました。『ああ、彼女なら車のなかにいますよ。』」

みどりさんはろうそくの揺れる夜の町を、彼の背中のあとについて歩きました。

駐車場に車がありました。

彼は、車の助手席のドアを開けました。誰もいません。そこには、鳳仙花が描かれたピンクの風呂敷包みが置いてありました。

「この箱のなかの壺に、裕子は眠っているんです。手術したけどダメだった……」みどりさんの瞳が涙の湖になるのに、時間は必要ありませんでした。

「あれから僕は、彼女とこうしてずっと旅を続けているんです。裕子は鳳仙花が好きだったから、今夜はここにやってきました。きっと、裕子は鳳仙花を見たかったらうと思っただけ……」

みどりさんは、この夜、ご主人と出会わせてくれたのは裕子さんにちがいないと思えました。そして、「私があなたに連絡

するまで、あなたは何もしないこと」と言った裕子さんの声が再び、聞こえたような気がしました。

このお話は月刊誌MOKUと、著者三遊亭鳳豊師匠のご厚意による転載です。雑誌の表紙に「生きる意味を深く耕す」とあるように、毎号参考になる記事がいっぱいです。



▼カラスウリ【ウリ科カラスウリ属】。里山の縁など、人の近くに生える多年性のつる草。日暮りに咲いて朝にはしぼむので、実物を見た人は少ないかも知れません。花の大きさは、糸状の部分を含めて7~8センチ。地中にダリヤのような根塊（芋）があります。糸のような花びらの先は、よくもまあと思うほどの繊細さです。木枯らしの吹く頃、赤く色づいた果実を目にしますが、年の瀬近さを実感します。あせもよけの『天花粉』は、仲間のキカラスウリの根塊から取れる澱粉だそうです。

2013/08/09 龍渉

▼立秋が過ぎたのに、うだるような暑さになりました。お元気でしょうか。今月は敗戦から68年になるそうです。あれもこれもと、つい表の文章が多くなって、余滴はこちらに引っ越しです。▼今月は月遅れのお盆でもありますが、「お棚」を飾る家が少なくなったように思いますが、出来る限り仕来りは守りたいものです。形の手抜きは、一番大事なもてなしの心の手抜きに繋がります。▼第三日曜日はオープンテラスですが、お盆行事が立込んでいますので、今月はお休みにします。

余滴

